

漢文及歴史科・同英語及歴史科と幾度遷して、一四年九月に大学部文学科に史学及社会学科が設置されて、「史学科」は文学部に定着するようになった。さらに、一九年

四月に文学科が哲学・文学・史学の三専攻に分けられ、史学の中に国史・東洋史・西洋史の三専攻が置かれたのである。

四、内田銀蔵・久米邦武・吉田東伍

こうした中で、日本史学の基礎をつくったのが、当初は卒業生で、日本経済史研究の先駆者となった内田銀蔵であり、次いで漢学者系統の歴史学の大家久米邦武であり、学歴を持たない独学者で、社会経済史を重視して歴史地理・社会史・芸能文化史等に独自の研究領域を開拓した吉田東伍であった。彼らを中心にして、早稲田大学から『史学科講義』『歴史地理科講義』の通信教育の講義録が発行され、初めての通史『大日本時代史』全一〇巻が刊行された。

こうした中から、西村眞次・京口元吉・深谷博治・荻野三七彦・洞富雄・水野祐・滝沢武雄・桜井清彦等が輩出し、母校の教

壇に立つようになったのである。

西洋史学の開拓者

― 煙山専太郎 ―

栄田卓弘

浮田和民が東京専門学校で西洋史学と政治学を講ずるようになって五年後の明治三五年（一九〇二年）に煙山は早稲田大学の講師となり、浮田と共に草創期の早稲田の西洋史学を担うことになった。ここでは多産な煙山の作品のうち主著のいくつかを取りあげ、世界史家、現代史家としての煙山に焦点を絞って紹介し、その両要素が彼のなかでどのような関係にあったかを明らかにしたい。

煙山専太郎は『近代無政府主義』（一九〇二）という問題作をひっさげて登場した。この本は、東京帝国大学在学中に執筆されたもので、著者の意図に反してあの大逆事件のアナーキスト幸徳秋水らに大きな影響を及ぼしたことでも有名である。無

政府主義という「惨烈な運動」の実体を明らかにしようというこの極めて客観的な作品が現実の運動に影響を及ぼしたことは注目に値する。浮田が『太陽』の主幹として直接社会に影響力を発揮したのとは対照的といえよう。

ところで、世界史家としての煙山の業績は東洋では『日本最近世史』（一九〇八）をはじめ『征韓論実相』（一九〇七）『世界史上の支那』（一九三八）があり、専門のヨーロッパについては、英独仏はいうにおよばず、ロシア史や客観的ユダヤ史研究でも先駆的な役割を果たした。しかし、世界史はこのような取扱う領域の広さだけによるのではない。各国史を寄せ集めただけでは世界史とはならないからである。近代歴史学の祖ランケは、哲学などの先入見を持たずに歴史事実のなかから支配的な傾向つまり主流を見いだして歴史を叙述する世界史を主張した。

煙山は最晩年の『世界大勢史』（一九四四）で、わずか二四〇頁足らずで、古代以降の

中国、インド、回数圏、東欧にいたるまで目くばりした世界史を呈示した。そしてその立場は基本的にランケ的な世界史観に立つものといつてよい。しかし煙山は、ランケが抜け出せなかったヨーロッパ中心の立場を乗り越えていた。もとよりそれは、第一次世界大戦後のヨーロッパ人の歴史観の変貌に棹さすものであったが、東洋人として煙山はより有利な地位にあったといつてよい。

煙山の歴史への関心は、とりわけ現代史に集中していた。『征韓論実相』は当時の生存者に実情を問うたり、彼らから得られた史料を駆使するという現代史研究の利点を十二分に発揮した力作である。そのほか処女作『近世無政府主義』をはじめ『西洋最近世史』（一九二二）や『獨逸膨脹史論』（一九一九）『獨逸社会民主党』（一九一九）正統二巻の『英国現代史』（一九三〇、一九三六）などすべて現代への関心から発した労作といえよう。

ところで世界史と現代史という二つのジャ

ンルは、煙山にとって別個のものではない。彼は「近代も中古も古代も將た先史時代も皆齎しく現代から遠く之をふりかへて見て、之をば現代の事相と照合せて見ることによって初めてその各の有する真義」が明らかになると書いている。両者は煙山のなかで渾然と融合していたといつてよいのである。

〈第二回〉

東アジア世界論の創始者

— 栗原朋信 —

工 藤 元 男

高校の世界史の教科書では、近代以前の世界をいくつかの文明圏に分けてその歴史が説明されている。「東アジア世界」もその一つであるが、それは如何なる世界秩序だったのか。その理論モデルを初めて提示したのが栗原朋信先生（一九〇九〜七九）であった。

栗原先生の主著『秦漢史の研究』（吉川弘文館、一九六〇）は、大まかに言うところ『史記』秦始皇本紀に関する文献批判の研究、および文献に見える秦漢璽印の研究の二つから成っている。前者は始皇帝の年代記である秦始皇本紀にしばしば秦を滅ぼした漢の側から書かれた記事が混入していることを指摘し、秦代史研究の文献学的研究の基礎を築いたものである。後者は秦漢時代の印章制度を文献学的に検証し、その印章制度の体系がそのまま中国の皇帝を中心とする東アジアの秩序構造を反映するものであることを論証したものである。

この栗原先生の研究は内外の研究者に多大な影響を与え、例えば戦後東洋史学のオピニオンリーダーの一人だった西嶋定生氏は、この研究に依拠して東アジア世界の政治体制を「冊封体制」と命名した。海外では米国の中国研究者として著名なジョン・キング・フェアバンク氏が栗原学説を下敷きにして中国的世界秩序（Chinese World Order）を提唱した。